

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニュース

No.29
AUTUMN 2012



初代嵐吉三郎暇乞摺物

目次

●メッセージ

柿本人麻呂の挨拶……………運営会議委員・大谷 雅夫 1

●研究ノート

下河辺拾水の伊勢物語挿絵について……………藤島 綾 2

統合検索システム nihuINTと古事類苑データベース……………古瀬 蔵 4

●トピックス

第5回日本古典文学学術賞受賞者発表……………6

第5回日本古典文学学術賞選考講評……………6

研究展示「江戸の「表現」—浮世絵・文学・芸能—」……………山下 則子 8

特別展示「樋口一葉「たけくらべ」自筆原稿展」

国文学研究資料館創立四十周年展示……………谷川 恵一 9

通常展示「新収品・新寄託品展 古筆のたのしみ」……………海野 圭介 10

第36回国際日本文学研究集会「再生の文学—日本文学は何を発信できるか—」プログラム… 11

平成24年度サテライト講座……………13

第6回文化財保存修復学会業績賞 授賞……………13

総合研究大学院大学日本文学研究専攻 入学者募集……………14

柿本人麻呂の挨拶

大谷 雅夫（国文学研究資料館運営会議委員・京都大学大学院文学研究科教授）

柿本人麻呂の歌と言えば、小中学校の国語で習ったはずの「東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月傾きぬ」や、百人一首で耳になじんだ「あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む」などがまっさきに思い出されることでしょう。「笹の葉はみ山もさやに」、「いさよふ波のゆくへ知らずも」に心ひかれるという方も多いでしょう。

古にありけむ人も我がごとか妹に恋ひつつ寝ねかてずけむ

名歌の多い人麻呂の作品のなかで、これはあまり目立たない、もしかしたら知る人の少ない一首ではないでしょうか。

『萬葉集』巻四の「相聞」の部に収められた「柿本朝臣人麻呂の歌四首」の第二です。「相聞」と言うからには恋の歌のはずですが、恋歌らしい激しさ、切なさが見られません。旅の空なののでしょうか、あるいは片恋なののでしょうか。妹への恋のために眠れない男が、その激しい恋情に身をゆだねるのではなく、ふと我に返って、この恋の苦しみは、過ぎた世の人々も同じように味わったものだろうかと思ったのです。「古にありけむ人」とは、いずれの世の誰かという特定の人を指すのではありません。過去の世の人すべてを含んで言うのです。おのれの今の激情にとらわれるのではなく、それを昔も今も変わらない人の心にとらえたのです。

恋の歌は、ふつうは自らの切ない恋情を訴えて、相手の心を何とかつき動かそうとするものです。同じ巻の同じ「相聞」の部の作にも、「命死ぬべく恋ひわたるかも」、「君をし思へば寝ねかてぬかも」、「袖ひつまでに音のみし泣かも」など、死にそうだ、眠れない、声をあげて泣くばかりだと詠います。それが恋歌です。「古にありけむ人」を思うというような思索的な歌は他に見あたりません。

実は、「柿本朝臣人麻呂の歌四首」の第三は、この歌に対する女性の返歌のかたちをとっています。「今のみのわざにはあらず古の人そまさりて音にさへ泣きし」。あなたは古人も同様とおっしゃいますが、ほんとうは、声をあげて泣いた昔の人の恋心の方が増さっていましたよと言うのです。その女の歌も人麻呂の作であるとするなら、人麻呂は、そのような架空の相聞によって、恋心が昔も今も変わらないことを、また今の人々の心から昔の人の心へとまっすぐに遡りうることを、語りたかったのではないのでしょうか。

柿本人麻呂歌集の歌には、

古にありけむ人も我がごとか三輪の檜原にかざし折りけむ
古の賢しき人の遊びけむ吉野の川原見れど飽かぬかも

という作もあります。恋の歌ばかりではなく、景勝地に行楽した歌の場合にも、そこで同じように遊んだに違いない古人を思っています。人麻呂には、現在からたちまち過去に遡ることのできるよほど鋭い直感力があったのでしょうか。古人の心を自らのうちにたしかに蘇らせることができたのです。

昨年の初夏、研究室の旅行で西尾市立図書館の岩瀬文庫を訪ねました。一万八千点にもものぼる古書を読破し、そのデータベースを作っておられる名古屋大学の塩村耕先生に、お願いして文庫の概要を解説していただきました。講義は多岐にわたりましたが、そのなかで、ことに私の記憶に刻み込まれたのは、「このたくさんの書物を書いた人たちはみな死んでいるのですね」という一言でした。書物の一冊一冊を読むことによって死者たちが自らの心のなかに次々と蘇ってくる、そのような思いがあるのだろうか。それこそ、国文学という学問の本義本領ではあるまいかと、ちょっと大げさなことまで考えて、塩村さんの横顔を見つめたことでした。

現在が遠い過去からの持続する時間の上にあることを感じ、古に遡り、また今に立ちかえる。そのような心の働きが重要であることは言うまでもありません。私たちは、「命死ぬべく恋ひわたるかも」などと、おのれの今の激情に身をゆだねてしまうことを時に免れないでしょう。しかしその一方で「古にありけむ人も」と古人の心を思い出すことも絶対に必要です。記憶を失った人間には衝動があるのみ、思索することは難しいでしょう。国文学という学問は、過去の記憶を正しく蘇らせ、そしてそれを将来の世の人たちに伝えてゆく重い責めを負っているのではないのでしょうか。

我ゆ後生まれむ人は我がごとく恋する道に遇ひこすなゆめ

これも人麻呂歌集の作です。後の世の人よ、自分のようなつらい恋を決してなさるなよと忠告してくれているような歌です。恋の心を、昔も今も、そして未来永劫に変わらぬ人心と見てとった人麻呂は、苦しい恋に出会うに違いない私たちに、遠くやさしい挨拶を送っているのです。

下河辺拾水の伊勢物語挿絵について

藤島 綾 (国文学研究資料館特任助教)

1. 下河辺拾水という人物

伊勢物語の絵入り板本を見ていくと、挿絵に関して、絵師の姓名を記した本、姓や門流だけを載せた本、無記名の本とさまざまである。ただし、享保以降に作られた本には原則として記名があり、その挿絵を誰が描いたのかわかるようになっている。西川祐信、月岡丹下、岡田玉山などの絵師の名が挙がっているが、今回とりあげる下河辺拾水もまたそのなかに含まれる一人である。

拾水は18世紀後半の上方で活動した人。経歴については不明な点が多いが、京都妙心寺前に居を構え、寛政13年(1801)には没したと推定されている。明和から寛政(1764～1801)頃を中心に100点を超える本、具体的には、往来物、重宝記、地誌などの実用書や絵本類、百人一首・伊勢物語・徒然草といった古典作品などに絵を描いた。また、版下の文字を書くこともあった。これまで古典文学研究の分野であり注目されてこなかった人物であるが、かつて松平進氏は、拾水の画業について、「祐信以降の京都でその空白をうめる位置の絵本画家。従来等閑視されてきたが、上方絵本史での名手」(『日本古典文学大辞典』)と評されている。また、伊勢物語絵入り板本史について考える場合、複数の本に名を記す拾水は、18世紀後半の伊勢物語挿絵の実態を考える上でも興味深い人物なのである。

2. 拾水の挿絵を持つ板本

拾水画とされる伊勢物語絵入り板本の挿絵に三種類があることは知られていたが、今回、稿者はさらに別の挿絵を確認した。天明7年(1787)に刊行された『女万宝大和文林』という本の挿絵である(刊記に拾水の名を記載。酒田市立光丘文庫蔵。国文学研究資料館マイクロフィルム〔26-152-1〕にて閲覧可能)。書名からもわかるように、女性に必要な教養をまとめた内容で、手紙の書き方などが示された紙面を上下二段に区切り、上段に業平・伊勢像さらに伊勢物語本文と挿絵を記載している(図1)。江戸時代、伊勢物語に否定的な評価があった一方、女性が身につけるべき教養に数えられていたこともわかる本である。

さて、『女万宝大和文林』の確認により、拾水画とされる伊勢物語挿絵には、

- ・明和4年(1767)『新板伊勢物語』
- ・天明7年(1787)1月『新板伊勢物語』(『新板絵入伊勢物語よみくせすみにごり付』とも)
- ・天明7年(1787)1月『女万宝大和文林』
- ・寛政5年(1793)11月『伊勢物語』



図1 女万宝大和文林 酒田市立光丘文庫蔵

の四種類があることがわかった。この四種の刊行時期と拾水の活動を重ねてみると、明和4年本は拾水が挿絵を描いた本が出版されるようになって間もなく、いわば絵師としての活動初期に出された本であり、それから20年後に天明7年本と『女万宝大和文林』が出され、さらに6年後の活動末期に寛政5年本が出たことになる。このように一人の人物が四種の伊勢物語板本の挿絵に関わった例は、今のところ、ほかに確認できていない。20年以上を経て描かれたこれらの挿絵に何らかの違いがあるのか、ないのか、もしあるとすればどのような違いで、理由は何か、気になるところである。

3. 伊勢物語初段の挿絵

次に示すのは伊勢物語初段の挿絵である。初段は、成人したばかりの男が春日の里を訪れ、そこで垣間見た女はらからの魅力に心乱れ、自分が着ていた狩衣の裾を切って和歌を書いて贈るという内容である。この場面に、四種の板本は図2,3,4,5のような挿絵を持っている。



図2 明和4年本 都立中央図書館特別文庫蔵

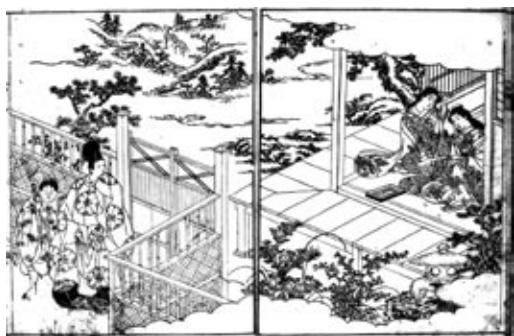


図3 天明7年本
都立中央図書館特別文庫室蔵

江戸時代の伊勢物語の挿絵は、17世紀初頭に刊行された嵯峨本の影響下にあったとしばしば言われるが、ここに



図4 天明7年
女万宝大和文林

示した挿絵は嵯峨本とは異なる点が多い。たとえば天明7年本(図3)の女性の髪型や衣装、庭に置かれた石灯籠などは伝統的な伊勢物語絵では見かけないものであって、いわゆる当世風の描写となっている。また、明和4年本(図2)もこの場面の描写としては前例を見いだせないものである。そのような中で、『女万宝大和文林』(図4)の描写は江戸時代前期から絵入り板本に見られる描写に近い。

じつは『女万宝大和文林』の挿絵は先行する板本に基づいて描かれたらしい。この本は全部で28図の伊勢物語挿絵を持つが、同じく28図を持つ伊勢物語絵入り板本が元禄期に刊行されている。とりわけ、元禄14年(1701)に出た『よみくせ入伊勢物語すみにごり』と『女万宝大和文林』は、いくつかの特徴的な描写が共通している。

一方、『女万宝大和文林』と同時期刊行の天明7年本は、元禄14年に刊行された伊勢物語をもとに拾水が文字と絵を書き再刻(新しく板本を彫ったこと)した本であることが、刊記に明記されて



図5 寛政5年本
都立中央図書館特別文庫室蔵

いる。ただ、天明7年本と現存する元禄14年本を比較した場合、挿絵の数や本文の文字遣い・字配りも異なっており、両者の関係をどう判断すればよいのか迷うところである。しかし、この『女万宝大和文林』の存在を考え合わせると、やはり拾水の手許に元禄14年本があった可能性は高いだろう。

4. まとめ

18世紀中頃になると、祐信や丹下などの絵師による新たな描写を持った伊勢物語絵入り板本が売り出された。拾水の活動期でもあった18世紀後半、丹下の本は大坂や江戸で随分売れたようである。その一方で、80年以上前の元禄期に作られた伊勢物語絵入り板本も依然影響力を保っていた。天明7年に作られた二種の拾水の絵入り板本は、当時も元禄14年本の需要があったことや(実際に18世紀後半にも京の書肆が販売していた)、元禄板本の影響を受けた挿絵を通じて読者が物語を理解する例があったことを示している。稿者は以前、伊勢物語歌がうたの絵札に元禄期の絵入り板本に依拠した図柄があることを指摘したが、人々の伊勢物語場面理解を考えるうえで、江戸時代後期となっても元禄期の絵入り板本が果たした役割が小さくなかったことを、これら拾水の挿絵を通じてもうかがい知ることができるのである。

図版掲載をご許可くださった各所蔵機関にお礼を申し上げる。

【主要参考文献】

- ・池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究』(大岡山書店、1933、1934年、再刊：有精堂出版1958、1960年)
- ・大津有一『伊勢物語に就きての研究』補遺篇・索引篇・図録篇(有精堂出版、1961年)
- ・関口一美『伊勢物語の整版本』(山本登朗『伊勢物語版本集成』竹林舎、2011年)。なお、氏は、寛政5年本は、別の絵師による挿絵を持つ絵入り本に、書肆が拾水の名を補ったものと指摘された。氏の説にしたがうと、寛政5年という、おそらくは拾水の在世中にそのような行為がされたことになる。当時の方における拾水の評価や晩年の事績にも関わってくる重要な指摘である。



図6 元禄14年本
都立中央図書館特別文庫室蔵

統合検索システムnihuINTと古事類苑データベース

古瀬 蔵 (国文学研究資料館教授)

人間文化研究機構の研究資源共有化推進事業で開発を進め、2012年5月7日にシステム更新したnihuINTと、人文科学分野の知識ベースとしてnihuINTの検索機能の高度化への貢献が期待されている古事類苑データベースの全文・抜粋検索版を紹介する。

■統合検索システムnihuINT

nihuINTは、図1に示すように、人間文化研究機構の全機関(国文学研究資料館の他に、国立歴史民俗博物館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館)、地域研究拠点、国立国会図書館の合計100以上のデータベースを検索対象とする。



図1 nihuINTの検索トップ画面

nihuINTには、幅広い検索対象によって、単独のデータベースでは発見できなかった情報を提示する横断検索ならではの特徴がある。研究分野別で、日本文学に分類されるデータベースは、館蔵高松宮家伝来禁裏本(国立歴史民俗博物館)、日本語研究・日本語教育文献(国立国語研究所)、米国議会図書館所蔵奈良絵本(国際日本文化研究センター)など、国文学研究資料館以外のものが多数ある。

2012年5月7日に公開した新システムは、更新前の旧システムや国文学研究資料館のデータベースにはない、検索結果分類などの先進的な機能を持つ。以下、nihuINTの代表的な機能を紹介する。

(1) ブラウジング

ブラウジング機能は、それぞれのデータベースに、どのようなデータが何件存在しているかを一覧表示し、検索条件設定のヒントを提示する。図2は、日本古典籍総合目録データベースにおいて

No.	種	レコード数
2901	『源氏』／全義解校本	1
2902	『源氏』／龍原校校本	1
2903	『源氏』／龍原校校本	2
2904	『権理抄』／大友親興之助(徳政人名)	1
2905	『権理抄』／日光道中和歌	2
2906	『権理抄』／終稿	1
2907	『権理抄』／終稿	1

「名称・題名」項目に属するデータの一覧を示す。

図2 日本古典籍総合目録データベースのブラウジング

(2) サジェッション

サジェッション(suggestion、「提案」や「示唆」の意味)機能は、後続する文字列を入力途中で補完して、利用者が入力したいキーワードの候補を提示することで、検索語の入

力の負荷を軽減することや、検索入力誤りを防ぐことが期待できる。提示するキーワード候補は、過去の検索でヒットしたキーワードである。キーワードごとに検索実績でスコアリングし、ランキング上位10件の候補を提示する。図3は、「藤原」と入力した段階で、キーワードの候補を提示している例である。

(3) 表形式とスニペット形式による検索結果一覧表示

図4に示すように、検索結果一覧の表示を、表形式とスニペット形式で切り替えることができる。初期表示画面は表形式である。表形式は、検索結果を比較しやすいよう整理して表示する。スニペット形式は、検索入力がどのようにヒットしたかが分かり、特に本文の検索

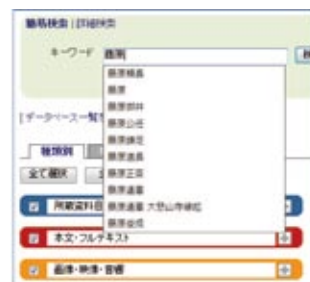


図3 キーワード候補の提示



図4 検索結果一覧の表示形式

(4) 検索結果分類

大量の検索結果から、必要とする情報を簡単に探し出せない場合がある。再検索を行わずに、検索結果の絞り込みを支援するために、nihuINTに検索結果分類の機能を導入した。検索入力「名称・題名」、「主題・種別」、「人物・組織」、「時期・日付」、「地域・場所」のいずれの項目でヒットしたかによって、検索結果を分類する。図5は、検索入力「石清水」に対する検索結果分類



図5 「石清水」に対する検索結果分類

第5回日本古典文学学術賞受賞者発表

日本古典文学学術賞は、財団法人日本古典文学会が主催していた日本古典文学会賞を継承し、若手日本古典文学等研究者の奨励、援助を目的として当館賛助会に設置し、平成24年度で第5回を迎えます。

第5回日本古典文学学術賞は平成23年1月～12月までに公表された日本古典文学に関する論文又は著書を対象の業績として、関連諸学会から推薦された選考委員及び過去の受賞者（日本古典文学会賞受賞者も含む）から推薦された対象者について、論文又は著書を選考委員会で審議しました。

選考委員会における審議の結果、第5回の受賞者を平野多恵氏（十文字学園女子大学短期大学部准教授）に決定し、平成24年9月3日（月）にパレスホテル立川（立川市曙町）で授賞式を開催しました。

授賞式では、選考委員会の鉄野昌弘委員長（東京女子大学現代教養学部教授）から選考の経緯について報告があり、その後、選考委員から受賞者の業績について講評がありました。



受賞者平野多恵氏



鉄野昌弘選考委員会委員長

第5回日本古典文学学術賞選考講評 平野多恵氏『明恵 和歌と仏教の相克』

日本古典文学学術賞選考委員会

平野多恵氏『明恵 和歌と仏教の相克』（2011年2月、笠間書院）は、中世和歌史上に特異な位置を占める僧侶歌人、明恵と和歌の関わりを論じたものである。平野氏は研究者としてのスタートから、一貫して明恵に取り組んで来られたが、本書はその約十年間にわたる論考をまとめたものである。

本書は大きく三つの部分から成っている。第Ⅰ部「和歌と仏教のかかわり」は明恵の和歌詠作の歴史をたどり、その特色と変遷を明らかにする。第Ⅱ部「西行から明恵へ」は、西行と明恵とのつながりを示す資料について検討し、二人の歌人の接点と、詠作態度の異なりを描き出している。第Ⅲ部「基礎資料の検討」では、明恵を論ずる際に欠かせない『明恵上人伝記』、『明恵上人遺訓』などの伝本論や享受論、また『明恵上人歌集』の編纂論などを収めている。

三つの部分のうち、主軸をなしているのは第Ⅰ部の和歌詠作史である。第Ⅱ部と第Ⅲ部は、第Ⅰ部から派生する問題や、それらを支える基盤的検討に当たるものと一応理解することができる。ここでは、第Ⅰ部の内容を中心にいくらかを紹介する。

平野氏はまず明恵の若年期の和歌資料に検討を加え、彼が仁和寺周辺に集う歌人たちの作品に影響を受けながら出発したと推定する。明恵は極めて特異な歌人として知られるが、初学期にはやはり周囲の歌壇から影響を受けたのであり、作例からその基盤を明らかにしたのは重要な業績である。

初学期の明恵に影響を与えた歌人を探っていく過程で、際立った形で浮かび上がったのはやはり西行である。平野氏は明恵の作品からそれを具体的に確証する一方で、従来西行から明恵への影響を示す資料としてしばしば引用されてきた『明恵上人伝記』中の西行の発言については、『伝記』諸本の系統的分析から、後の増補が含まれることを明らかにし、二人の関係についてより正確な把握を可能にした。

平野氏は、明恵の詠作史をたどりつつ、初期には彼が自分自身の迷いや矛盾をどう表現したら誠実であるのか、葛藤していたことを示し、それが逆に僧侶としては執着となっていたであろうと推測する。しかし明恵は壮年期に至ってそうした執着を離れ、表現の彫琢に意を用いず自由に表現していく境地に進み、さらに晩年には座禅入定の後の澄んだ心を詠むようになったとする。歌は悟りに至る過程では執着につながるものでしかなく、悟りを得た僧侶が菩薩の境位に立って詠むのならば否定されるものではないと明恵は考えるようになったのであろうと、平野氏は論じている。このようにして、明恵の作品群を、一つの精神の軌跡の上に整理して位置づけようと試みたことは、重要な提言と評価することができる。

この過程で、平野氏は明恵の歌集『遣心和歌集』の題名になっている「遣心」という言葉につき、その語義を追究し、これが「心遣り」という意味であり、心のままに詠み散らして心を慰めるものとしての詠歌をあらわす題名であったと論じている。平野氏の議論は、明恵の講釈聞書などに広く目配りをしたものであり、従来の研究を越えて安定感のある論述となっている。

以上、本書の中心をなす、明恵の和歌に関する議論からいくらかを紹介してきたが、ほかにも、説話研究の方面からは、『明恵上人伝記』の伝本研究や、そこから『明恵上人遺訓』が分出してくる過程の分析などが労作として認められるであろう。また、思想史研究の方面からは、明恵の訓戒として著名な、「あるべきやうは」の遺訓が、享受過程で意味を変容させていったとの指摘は注目に足るものであろう。平野氏のこうした総合的な研究態度については、選考委員会においても優れたものであると評価された。また、和歌、説話、仏教など、どの領域の研究者が読んでも理解することのできる平明で丁寧な文体で一貫していることも優れている。

本書には更に、基礎的資料の翻刻や、詳細な和歌関連年譜、『明恵上人伝記』に含まれる和歌の全注釈など、有用な附録が多く加えられており、新たな明恵研究のための基盤整備としての価値が高い。

以上のように高く評価される本書であるが、いささかの難点を指摘することもできる。まず、先行研究を継承しようとするあまり、その枠に寄り掛かりすぎていると感じられる部分が少なくないことである。新しい議論をしようとしているのであるから、独自の理解の枠組みを提示することも大事なのではないだろうか。また、明恵について批判的に議論しているところがないのも気に掛かることである。敬愛一辺倒では論述が偏ってしまう恐れがあり、平野氏が明恵以外の対象に今後切り込んでいく際にも不安が残る。

しかし、そうした点を考慮してもなお、本書が若手の業績として優れたものであることは十分に認められ、今後も継続的に研究を深めていくことが期待できる人材であると考え、選考委員会は全員一致で、本書を古典文学学術賞を授与するに値する成果であると判断した。

なお、対象となる時期の平野氏の業績には、ほかに「明恵—菩提への道」(阿部泰郎・錦仁編『聖なる声 和歌にひそむ力』、2011年5月、三弥井書店、所収)および「無住における和歌—『沙石集』の増補改訂と詠歌活動—」(長母寺開山無住和尚七百年遠諱記念論集刊行会編『無住—研究と資料』、2011年12月、あるむ、所収)があったことを付言する。

研究展示「江戸の「表現」—浮世絵・文学・芸能—」

平成24年10月17日(水)～11月20日(火)に、研究展示「江戸の「表現」—浮世絵・文学・芸能—」を開催します。これは日本人が大好きだった「表現」のいろいろについての展示です。これらの表現様式は、現代ではほとんど忘れられていますが、時々思い出したかのように目の前に浮上します。江戸時代300年の平和の中で、それまでの日本文学の伝統や中国文芸からの影響が熟成されて、独特な発展を遂げた表現様式が多く生み出されました。こうした様々な表現様式を、浮世絵・文学・芸能の分野を超えて総合的に研究した成果を、新出資料を交えて展示します。また楽しく美しい展示物が多いのも、今回の展示の特色になると思います。展示構成は次のようになります。

- | | |
|-----------------------|----------------|
| 第一部 中世から近世へ(一)扇の草子 | 第六部 句兄弟から絵兄弟へ |
| 同(二)「職人歌合」の世界 | 第七部 「評判」の様式 |
| 第二部 役者見立絵—その発生から定着まで— | 第八部 「やつし」と縮景 |
| 第三部 歌仙絵の展開 | 第九部 尽くしものと「揃え」 |
| 第四部 ことばの見立て—地口— | 第十部 知の交流 |
| 第五部 見立絵本と開帳 | |

珍しい資料も数多く出品されます。例えば日本の多色刷り浮世絵の源流とされる中国の詩箋(図版①)は、江戸時代初期の儒学者である林羅山が孫の梅洞にあてた書簡に使用されているものです。歌舞伎役者と遊女の歌合で歌人を鳥に見立てた『おもはく歌合』(図版②)や、狂歌師が開帳や見世物を絵本にした『造物趣向種二編』や、謎解き要素の大きい『扇の草子』を屏風形態にしたものや、「東海道五十三次」を鉢の上に築いた鉢山の絵本(図版③)があります。「五十三次」を題材とした現存最古の双六仕立て俳諧一枚摺や、ごく初期の歌舞伎役者による俳諧摺り物(表紙絵)、『句兄弟』や『新句兄弟』が絵画表現になったもの、「近江八景」を美人画にしたものなどが展示されます。

なおこの展示は平成22～24年度の特設研究「近世的表現様式と知の越境—文学・芸能・絵画による総合研究」プロジェクトの研究成果を展示するものです。(山下則子)

開催期間： 平成24年10月17日(水)～11月20日(火)

開催時間： 午前10時～午後4時30分 ※入場は午後4時まで

休 室 日： 10月21日(日)、22日(月)、27日(土)、28日(日)、11月4日(日)、5日(月)、10日(土)、11日(日)

入 場 料： 無料

開催場所： 国文学研究資料館1階展示室



図版①: 詩箋



図版②: おもはく歌合



図版③: 53 駅鉢山図絵

特別展示「樋口一葉「たけくらべ」 自筆原稿展」 国文学研究資料館創立四十周年展示

このたび、国文学研究資料館では、創立四十周年を記念し、地域と連携した文化活動の一環として、所蔵者であられる立川市の無門庵のご厚意により、樋口一葉の「たけくらべ」自筆原稿を展示する運びとなりました。

一葉の代表作である「たけくらべ」は、明治二十八年一月から翌年の一月にかけて『文学界』に断続的に連載されたのが最初ですが、明治二十九年四月には、博文館が前年に創刊した文芸誌『文芸倶楽部』（第二巻第五編）に一括して再掲載されました。この年の十一月二十三日に一葉は数えの二十五歳でこの世を去りますから、その死のほぼ半年前のことになります。今回展示するのは、この『文芸倶楽部』に掲載した際に一葉が博文館に渡した自筆の原稿です。

この原稿は、一葉の二十三回忌に博文館から影印本が出されていますが（『たけくらべ』、大正七・一一）、同書の刊行を斡旋した馬場孤蝶は、同書に添えた「跋として」の中で、「たけくらべ」再掲載前後のいきさつを次のように推定しています。

『たけくらべ』が『文学界』に連載されて居るうちは、まだ世間ではそれ程評判にはなら無かつた。所が、『文学界』の方で完結してから、明治二十八年の暮ごろのことであらうが、一葉君は何か金の入用（法事の為めだとかいふ）があつて、乙羽氏に前借か何かを申し込むと、乙羽氏の答は、『何でも宜しいから、原稿の形をしたものを持つて来て呉れ、さうすれば、然るべく取り計らうから』といふのであつたので、^{これ}此でも持つて行けといふので、大急ぎで『文学界』に出て居る『たけくらべ』を書き写して、乙羽氏に渡し、それが翌年の春になつて『文芸倶楽部』に載つて、一葉君の名声全く隆々たるに至つたのである。

乙羽氏とは、硯友社の作家で明治二十七年に博文館を経営していた大橋家へ婿入りして支配人となった大橋乙羽のことで、半井桃水から一葉を紹介された乙羽は、この時期、「たけくらべ」以外にもいくつかの作品を博文館の雑誌に掲載し一葉を経済的に支援していました。『文学界』が同人誌だったのに対し、『文芸倶楽部』は商業誌であり、一葉はこの原稿と引き換えにいくばくかの金を手にしたと思われます。孤蝶によれば、明治三十四年の乙羽歿後、「たけくらべ」の原稿はその子息である佐太郎のもとに伝えられていたということです。

この「たけくらべ」の原稿は、博文館のもの以降も何度か影印本が刊行され、それらに基づいて筑摩書房の樋口一葉全集の底本にも採用されていますが、これまで実物が入びとの目にふれたのは、第二次世界大戦後に都内のデパートで行われた展示と、平成十六年に山梨県立文学館で行われた樋口一葉展1「われは女なりけるものを—作品の軌跡—」のわずか二回にすぎません。資料保存のため今回は展示期間を短くしておりますが、ぜひ国文研に足を運ばれ、加藤千蔭の流れを汲む美しい書体で書かれた一葉の名作をご鑑賞ください。

なお、本展示の開催にあわせ、11月18日（日）午後三時四十分より、一葉の草稿研究で知られる相模女子大学教授戸松泉氏による「「たけくらべ」自筆草稿を開く」と題した講演を、展示室の上の大会議室にて行います。研究の最前線のお話をうかがうまとない機会ですので、こちらもふるってご参加ください。

開催期間：平成24年11月12日（月）～11月20日（火）

開催時間：午前10時～午後4時30分 ※入場は午後4時まで

入 場 料：無料

開催場所：国文学研究資料館 1 階展示室

本展示は、同時に開催している研究展示「江戸の「表現」—浮世絵・文学・芸能—」の一角を区切って実施いたします。併せて研究展示もご展覧ください。（谷川恵一）



樋口一葉自筆「たけくらべ」原稿（複製）
（無門庵蔵）

通常展示 「新収品・新寄託品展 古筆のたのしみ」

国文学研究資料館では、平成24年12月12日（水）～平成25年1月11日（金）の期間、通常展示「新収品・新寄託品展 古筆のたのしみ」を開催します。

本展示では、当館が近年新たに収集した資料および御寄託いただいた資料のなかから、主として和歌に関わる資料を展示します。中心となるのは、平安時代から室町時代にかけて書写された資料で、室町時代中期以降、その書の美を愛でて掛幅や手鑑に改装され鑑賞された古筆と称される作品群です。

○主な展示作品

- ・新古今和歌集草稿断簡 （鎌倉時代）

平成22年度新収資料。本作品は、藤原定家による『新古今和歌集』の撰集過程を伝える草稿と考えられる資料です。長らく所在不明でしたが近年再発見されました。

- ・重要文化財 春日懷紙 （鎌倉時代）

平成22年に重要文化財に指定。本展示は指定後初の展示です。

- ・伝宗尊親王筆如意宝集切 如意宝集断簡 （平安時代）
- ・伝源俊頼筆民部切 古今和歌集断簡 （平安時代）
- ・伝源俊頼筆尼崎切 万葉集断簡 （平安時代）
- ・藤原定頼筆山城切 和漢朗詠集断簡 （平安時代）
- ・伝藤原俊忠筆二条殿切 類聚歌合断簡 （平安時代）
- ・伝寂然筆大富切 具平親王集断簡 （平安時代）
- ・伝藤原為家筆箔切 金葉和歌集断簡 （鎌倉時代）
- ・伝慈円筆円山切 新古今和歌集断簡 （鎌倉時代）
- ・伝民部卿局筆秋篠切 後撰和歌集断簡 （鎌倉時代）
- ・伝藤原為家筆角倉切 新古今和歌集断簡 （鎌倉時代）
- ・伝藤原為家筆鵜飼切 続古今和歌集断簡 （鎌倉時代）
- ・毘沙門堂本古今集注

平成23年度新収資料。本作品は、『古今和歌集』におさめられた和歌を、その詠作事情や歌詞の由来を説明する説話を加えて注する注釈書で、鎌倉時代における和歌の享受の具体相を窺う貴重な資料です。

※全て、当館蔵又は当館寄託品

※一部の作品は、文化財保護のため展示替えを行います。

開催期間： 平成24年12月12日（水）～平成25年1月11日（金）

開催時間： 午前10時～午後4時30分 ※入場は午後4時まで

休室日： 土曜、日曜、祝日 ※12月28日～1月6日は休室

入場料： 無料

開催場所： 国文学研究資料館1階展示室

（海野圭介）

第 36 回国際日本文学研究集会「再生の文学—日本文学は何を発信できるか—」プログラム

平成24年11月17日(土)

総合司会 入口 敦志(国文学研究資料館助教)

【受付開始】 12:00～

【開会挨拶】谷川 恵一(国文学研究資料館副館長) 13:00～

【第1セッション】司会 板坂 則子(専修大学教授)

研究発表

①種彦合巻『曾我太夫染』における考証の方法—八つの注釈をめぐって— 13:10～13:40
金 美真(東京大学大学院博士課程)②『伽婢子』における典拠の再生—＜批判＞の独自性をめぐって— 13:40～14:10
盧 俊偉(北京外国語大学大学院博士課程・国文学研究資料館外来研究員)③近世文学における楠正成伝説の再生—南朝復興の物語への転換をめぐって— 14:10～14:40
李 忠濤(高麗大学校非常勤講師)

【休憩(10分)】 14:40～14:50

【第2セッション】司会 青田 寿美(国文学研究資料館准教授)

研究発表

④「一九二八年三月十五日」の「芸術的欠陥」について 14:50～15:20
梁 喜辰(中央大学大学院博士課程)⑤茂吉の再生 15:20～15:50
佐々木 比佐子(総合研究大学院大学博士課程)⑥志賀直哉『大津順吉』における「私」の心理 15:50～16:20
Moinuddin MOHAMMAD(大阪大学大学院博士課程)

【休憩(10分)】 16:20～16:30

【ショートセッション】司会 相田 満(国文学研究資料館准教授) ①～③

野網 摩利子(国文学研究資料館助教) ④～⑥

①九曜文庫本『源氏物語抄』と『水原抄』『千鳥抄』『珊瑚秘抄』 16:30～16:45
Tarin CLANUWAT(早稲田大学大学院博士課程)②『狭衣物語』における身分意識—『源氏物語』との類似点と相違点、海外の研究での評価— 16:45～17:00
Michelle MYERS(名古屋大学大学院博士課程)③中世文学の模倣やパロディの多面性—『とはずがたり』における『源氏物語』摂取をめぐって 17:00～17:15
Raisa Katariina PORRASMAA(法政大学大学院研究生)④『太平記』『楊国忠事』段所引の『白氏文集』本文の系統と考察 17:15～17:30
金木 利憲(明治大学専任助手)⑤平安朝女流文学における蛍の心象表現—恋心の働きと魂について 17:30～17:45
巖 守潔(台湾大学修士課程)⑥日韓関係における『胡砂吹く風』の価値 17:45～18:00
劉 銀炅(中央大学大学院博士課程)

【事務連絡・会場移動】 18:00～

【レセプション】 18:20～19:20

平成24年11月18日(日)

総合司会 海野 圭介(国文学研究資料館准教授)

【受付開始】

9:30～

【第3セッション】司会 中川 成美(立命館大学教授)

研究発表

- ⑦ 深沢七郎作品における「前近代」の再生－『楢山節考』と『甲州子守唄』を中心として
高 艶(東京外国語大学大学院博士課程) 10:30～11:00
- ⑧ 描写が再生する日本の風土
南 明日香(相模女子大学教授) 11:00～11:30
- ⑨ 廃墟と再生：田山花袋の関東大震災
Bates ALEX(ディキンソン大学助教授) 11:30～12:00

【休憩(120分) 昼食・ポスターセッション】

12:00～14:00

【第4セッション】司会 坂本 信道(京都女子大学教授)

研究発表

- ⑩ 平安朝漢詩の展開－『新撰万葉集』漢詩と道真詩に詠まれた蜘蛛の糸
梁 青(名古屋大学大学院博士課程) 14:00～14:30
- ⑪ 『看聞御記』に再生した「をかし」美意識としての「殊勝」
Adam BEDNARCZYK(ニコラウス・コペルニクス大学准教授) 14:30～15:00
- ⑫ 他者という規制装置－『源氏物語』を題材に
鷺山 郁子(フィレンツェ大学教授) 15:00～15:30

【休憩(10分)】

15:30～15:40

【公開講演】「たけくらべ」自筆草稿を開く 一樋口一葉〈書くこと〉の領域－

15:40～16:55

戸松 泉(相模女子大学教授)

【総括】

16:55～17:05

【ポスターセッション】 11月17日(土)～18日(日)(18日 12:00～14:00 発表者による説明あり)

- 大江健三郎『治療塔』における死と再生 －「3.11」という“未来の経験”
南 徹貞(東京外国語大学大学院博士課程)
- 長谷川如是閑にみる「笑い」－戯曲『大臣候補』を中心に－
小田切 璃紗(東洋大学大学院博士課程)
- 『諸艶大鑑』における世伝の人物造型についての検討－世伝は色道の「二代目」たり得るか－
水上 雄亮(武蔵高等学校中学校専任教諭)
- 井上靖シルクロード詩集における言語指向－素朴的、始源的、直接的な指向をめぐる－
顧 偉良(弘前学院大学教授)
- 日本文化の精神性と枳形本についての一考察 －『おくのほそ道』の造本を出発点として－
西 いおり(京都産業大学益川塾研究員)
- 『潮騒』における「婿選び」－説話主題と共同体神話の再生
余 筱秋(東京外国語大学大学院博士課程)

平成24年度サテライト講座

当講座は都心の会場を使用し、当館の教員が一般の方を対象として日本文学及び関連分野を中心に開催している講座です。

毎回テーマを決めて、当館の研究成果をわかりやすくお話します。

日 時：平成24年12月8日(土) 13時～16時

場 所：エッサム神田ホール(東京都千代田区神田鍛冶町)

テ マ：近代文学

講 師：谷川 恵一(国文学研究資料館教授)「明治の時間・明治の文学」

青田 寿美(国文学研究資料館准教授)「“書脈”を追う―典籍に残された印と証^{しるし あかし}」

定 員：80名(応募者多数の場合は抽選)

※事前申込が必要です

聴 講 料：無料

申込方法：ハガキまたはFAXで、郵便番号、住所、連絡先の電話番号、氏名(フリガナ)をご記入のうえ、下記の申し込み先までお送りください。

締め切り：平成24年11月1日(木) ※消印有効

受講をさせていただく方には受講票をお送りします。

申込み先：〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

国文学研究資料館「サテライト講座」係まで

FAX番号 042-526-8604



平成23年度サテライト講座の様子

第6回文化財保存修復学会業績賞 授賞

当館の青木睦准教授が、「第6回文化財保存修復学会業績賞」を受賞しました。

同賞は、文化財保存修復学会が会員に対して表彰を行うもので、業績賞は文化財および文化財に関連する領域において、保存および修復の学理、修復技術および応用などの一連の研究および活動を通して、文化財の保存および修復の学理や技術の発展に多大な功績があったものに授与されるものです。

青木准教授は、アーカイブズの物理的原形をできる限り維持しつつ、永続的に歴史的文化的資源として利用可能であるように保存公開システムを適切に構築することが重要であると考え、個々の史料ではなく史料群としてのあり方を重視し、保存のための物理的コントロールを中心に研究してきました。今回、アーカイブズ保存管理への理解を深めるよう活動してきた青木准教授の活動が評価され、授賞の運びとなりました。

総合研究大学院大学日本文学研究専攻 入学者募集

平成25年度の入学者を、以下のように募集します。

【平成25年度入学者募集】

〔概 要〕 課程：大学院博士後期課程、学位：博士（文学）、募集人数：3 名

〔願書受付期間〕 平成24年11月30日（金）～12月6日（木）

〔選考方法〕 修士論文等の審査、面接（平成25年1月31日、2月1日予定）

また、平成24年10月20日（土）13時より、当専攻の入試説明会を行います。

入試説明会では、当専攻や入学試験についての説明の他、大学院生が使用する施設、普段入れない書庫の見学、研究展示「江戸の「表現」—浮世絵・文学・芸能—」の見学、特別講義の聴講ができます。ご関心のある方は、当館 Web ページ「総研大日本文学研究専攻」の「お問い合わせ先」よりお申し込み下さい。またお申し込みなしでも来館でも結構です。多数のご来館をお待ちします。

【入試説明会プログラム】

- 13時00分～ 専攻、入試についての説明
- 13時30分～ 総研大施設、図書館書庫等案内
- 14時10分～ 研究展示「江戸の「表現」—浮世絵・文学・芸能—」見学
- 14時30分～ 現役院生との懇談
- 15時00分～ 特別講義「江戸のおんなうた」（神作研一准教授）
- 16時30分～ 大学院担当教員研究室訪問



11月						
日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

12月						
日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

1月						
日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

★4月から平日の開館時間が9:30～18:00になりました。御注意ください。

● 開館 9:30～18:00 ● 請求受付 9:30～12:00,13:00～17:00 ● 複写受付 9:30～16:00

ただし、土曜開館日は、

● 開館 9:30～17:00 ● 請求受付 9:30～12:00,13:00～16:00 ● 複写受付 9:30～15:00

表紙絵資料紹介

初代嵐吉三郎暇乞摺物

(当館蔵 請求番号ユ 7-5-5)

多色摺物。1枚。縦 34, 9cm×横 46, 5cm。安永 8 年(1779) 秋頃制作。
絵師未詳。

歌舞伎役者の俳諧摺物としてはごく初期のもの。初代嵐吉三郎が大坂の最
辰に暇乞いのために配布した摺物で、吉三郎は安永 8 年 11 月の顔見世興行か
ら、京都の南側芝居に出演することになっていた。初代吉三郎の俳名は「里環」。
山科扇花とは、役者の山科槌五郎。二斗庵は著名な俳人で、句集『天明七年丁
未歳旦』には数多くの歌舞伎役者の句が載せられている。1770～80 年には、噺の会でも活動する。図は火桶で土
製の手焙。上に和紙を貼ってひびが入らないようにしている。覆いには唐子扇面図や白梅図が配され、繊細なデザイ
ンである。寒さにむかう時期に相応しい配り物である。(山下則子)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3

Tel.050-5533-2910 Fax.042-526-8604

発行日 平成 24 年(2012) 10 月 17 日

編集 国文学研究資料館広報出版室

印刷 株式会社アズディップ

©人間文化研究機構国文学研究資料館